

同年 七月 徴兵検査 陸軍となり函館

にて下船

同年十二月十日 山口四二連隊入隊 藤部隊

要員となる

入 ソ 昭和二十年九月 旧満州よりソ連ブラ

ゴエシチェンスクへ

帰 郷 昭和二十四年十一月五日

現 在 会社勤めを終え一老農として

後 記 二度目の御用船天領丸は、下船後、南

方のサイパン島輸送に回り四発の魚雷

命中、二分で沈没、乗組員五十人のう

ち助かったのは六人とのことだった。

(山口県 小曾根 三郎)

ライチハの少女

愛媛県 窪 田 貞 良

私の過去につき青春のひとつを記してみよう
と思いつながらペンを握ったが、もう五十年余の年
月が私を呼び起こしてくれない。

小生は国の為に生命を捧げ働くのだと自分に言
い聞かせていた十九歳の春、徴兵検査を受けたと
ころ、合格の通知が来た。夜間は青年学校に通
い、自分を守るため、また国を守るためと教えら
れ信じていた。春まだ浅い頃、その頃は八社八幡
宮の参拝が盛んであった。

八社八幡宮の紹介をします

第一番 湯月八幡宮

第二番 桑原八幡宮

第三番 日尾八幡宮

第四番 正八幡宮雄郡神社

第五番 日招八幡宮

第六番 山崎八幡宮朝日八幡神社

第七番 還熊八幡宮

第八番 勝山八幡宮

せめて故郷の神様へ八社参りをと思い、半日かけて自転車で参拝させていただいたのを思い出します。その後、満州独立守備第一二大隊第二中隊への入隊命令が来たのが昭和十一（一九三六）年三月であつた。

初年兵教育を終えた次の年、第五国境守備隊へ転属との命令。国境守備に就いている時、満人家族に事件が起きた。それは、近くの家族が娘を結婚式に連れて行って帰る途中、一家と親戚一家全員が狼に食い殺され、見ると人形、馬形もない、バラバラにされた人の手も足も頭も、人間、馬の形をしたものが一体もない。多くの狼に襲われたのだと現場検証に行き、今から何時間前にとすると身の毛もよだつ、人ごとではないと思つたもの

であつた。国境守備、それはアムール河をはさんでロシアの行動に目を光らせていた。

たまに匪賊が出た。情報収集に終始した余り銃撃戦はなかつた。気の休む時とてなかつたが、ある日部隊長から全員を集めて訓示があつた。今はロシアも温順なように思われると。今から故郷の面白い歌等歌つて…と盛り上がった頃、小生が青年学校で習つた詩吟に剣をとつて踊つたことを思い出した。「曾我兄弟」等二つ三つ。そんなことがあつて部隊長の当番兵になつた。ある時は弾の来る中を走り回つたこと等を思い出す。

そのうちに古参兵は除隊ということになり、ようやく故郷へ帰るのだと思つていた時、君達は帰つてはならない、孫呉野戦兵器廠へ残るのだとの命令。内地から家族を呼んでよいとのことで内地から家族を呼び、ようやく普通の生活に戻つて一年もたらずして、ロシアが約束を破り侵攻して来た。どうすることもできず家族だけは帰したものの、そのうちに大砲をつけたソ連戦車が入つて

来た。部隊長は天皇陛下の勅命を奉読し一同に伝えた。戦争は終わった。そして何日かして武装解除とのソ連からの達しと命令が入り、翌日マンドリン銃を持ったソ連兵に武装解除を受けた。悔しいやら悲しいやら、語りようのない気持ちで頭の中がいつぱいであった。もう生き恥をさらして故郷へ帰るのも…と想っていたが、ふと入営する時、八社八幡神社様へお参りしたときのことを思い出して、そうだ、どうしても帰らなければ神様に申し訳ができないと心に決め、どん底になっても生きて帰るのだと心を取り戻した。

ソ連兵の口を揃えての「スコラダモイ、東京ダモイ」の声と命令に従っていかなければならず、東京へ帰すのだと言ってシベリア鉄道に乗せられて一週間位汽車は走った。食う物もろくにくれず。そうこうするうちに移動命令で集合、今度はトラックに二十人位ずつ乗せられ、連れて行かれた所は建築現場、そこで釘作りをさせられた。ピアノ線をほどこき二、三センチメートルの長さに

切る。ソ連のピアノ線は曲がっているので苦勞のあぐく釘に使えるようにして、監督にハラシヨの言葉をいただいた。何をどうしてよいやら、道具から作っていかなければ仕事にならない現場でした。

翌年三月頃、また移動の命令が来た。着いた所は周辺何キロあるか判らない農場、多分ソフホーズであったと思う。馬鈴薯ジャガイモの大小の選別等に就かされた。ある日昼食の時間がやって来た。配給のパン二〇〇グラム位ずつ分け、食べようと皆で喜んでいた時、そこへどこから来たともなしに七、八歳の女の子が前に立ってじつと私のパンを見ているので、私は半分に割ってその女の子に与えた。するとその女の子は何も言わずにパンを食べてしまつて帰って行つてしまふ。戦友達に、「お前どうしたんだ、ただでさえ足りない物を」と言われて、「前に立って見ていられたらお前はどうかするんだ」位で話を切った。それから毎日のように僕の前に立って、パンをやらなければ帰らなく

なった。足りない空腹は草や野菜の残り物で班内へ帰って足らしていた。それもペーチカが使える季節だけ。これからどうしたものか、只々なるようにしかならない、もう故郷の神様におすがりするしかない、八カ所の神様に手を合わせていました。それから何日か過ぎた日の昼時、女の子が小生の足に抱きつき何か言って泣くので、私は驚き通訳に来てもらった、すると、もう父も母もいない、日本に連れて帰ってくれ。日本に行つて蜜柑を足るほど食べたい等、言葉は分かりにくかったが、親をなくした子の気持ち切々と伝わってきたひとときでした。シベリアであの頃蜜柑の味を知っているとはかなりの家庭の子供だと分かったがどうすることもできず、七、八歳位の女の子を見ると今でも思い出される。

あの女の子とはそれから三日程しか会えなかつた、私達はまた移動命令が来たのである。農場の仕事で気も楽であつたのに、今度は炭鉱の仕事で、毎日、戦友と木の箱の前と後で搔いて石炭を

貨車に積み込む仕事、重労働である。二人の息が合わなければノルマは達成できない、そんな仕事一年余り続いた。

夏の仕事帰りであつた。もう腹ぺこ、前を向いて歩くのが精いっぱい。ある河辺の道を収容所の方へ向いている時のことである。川の中がにぎやかで女の声があるので一同驚いた。中年の女の川遊び、裸になり、こつちを向いてワアワアお尻や乳を叩いたりさすったり、ロシア人にもこんな人達がいるのだつた。言葉が通じたら：等とも思うのであつた。

毎日ノルマのことだけ考えながら生きていかなければならない人生、そういうような社会に生きる人達は、どんなことを考えながら生きているのでしょうか。

【執筆者の紹介】

筆者窪田貞良氏は、大正六年九月九日、愛媛県松山市鷹子町にて、父・窪田祐次郎と母・タミヨ

の農家の長男として生まれた。十二歳離れた弟と姉一人妹二人の五人兄弟で、父は四十五歳で病死され、後に残された五人の子供は母に育てられたが、貞良氏は、高等小学校一年で父の死亡により中途退学して母の手伝いをしたのです。

徴兵適齢より一年早く志願して、本文にある通りソ満国境守備隊に昭和十一年三月に入隊以来、九年と四カ月、満州の地で軍務に精励した模範兵であった。短期間の現地満期の間に結婚したが、一年足らずでソ連軍の侵攻、終戦となり、抑留されライチハ（ライチヒンスク）外四、五カ所を転々として三カ年間の抑留生活であったが、元々お体が元氣だったのでしょうか、身体検査はいつも一級（ペールウイ）で、作業を休んだ日は一日もなかったとお聞きしている。

幸せなのは、結婚して間もなかった奥様は、運よくも北満の孫呉から家族の強制送還で昭和二十年の暮れには内地へ帰ることができたそうです。

復員後、子供さん四人に恵まれて現在は悠々自

適の生活で、抑留中のことなど思い出したり、真面目な性格はただ働くだけが趣味だと申されています。

財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部の会員であり、毎年、慰霊祭、総会にも出席して下さるし、慰霊碑の建立に際しましては多額の寄付もして下さった方です。

（愛媛県 山本 繁夫）

ソ連軍との交戦と

シベリア抑留記

熊本県 西川 勝

私の略歴

昭和十九（一九四四）年二月、福岡県立旧制嘉穂中学校卒業後、満州国奉天省本溪湖市本溪湖煤鉄公司（後に三社合併、満州製鉄株式会社と改称）に入社。昭和二十（一九四五）年二月、現地